

口永良部島の火山活動解説資料（令和6年2月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

口永良部島では、火口付近の浅いところでやや活発な地震活動が継続しており、新岳及び古岳火口周辺において噴火が発生する可能性があります。

古岳火口付近を震源とする火山性地震は、増減を繰り返しながら多い状態が続いていましたが、1月中旬頃から減少しています。新岳火口付近の火山性地震は、少ない状態となっています。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年7月以降、増加した状態が続いていますが次第に減少しています。

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されていましたが、11月頃から停滞しています。

新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和5年7月10日に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）及び火山現象に関する海上警報を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図6-②③、図7-③、図8）

火口付近の浅いところにおいてやや活発な地震活動が続いています。古岳火口付近を震源とする火山性地震は、増減を繰り返しながら多い状態が続いていましたが、1月中旬頃から減少しています。新岳火口付近の火山性地震は、少ない状態となっています。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

火山性地震の月回数は221回（1月：831回）と前月と比べて減少しましたが、2023年6月以降、増加した状態が続いています。古岳火口付近の火山性地震は216回（1月：801回）、新岳火口付近の火山性地震は5回（1月：29回）でした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和6年3月分）は令和6年4月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

28日に、振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が古岳火口付近で3回発生しました。口永良部島での火山性微動の発生は2023年9月30日以来です。

・噴煙など表面現象の状況（図2～図5、図6-①、図7-①）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（1月：400m）まで上がりました。古岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上100m（1月：200m）まで上がりました。

7日から9日に実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を観測しましたが、特段の変化は認められませんでした。古岳火口付近の地熱域についても引き続き確認されており、2023年10月頃から12月頃にかけて地熱域の拡大及び温度の上昇が認められましたが、1月以降、温度は低下傾向となっています。

・火山ガスの状況（図6-④、図7-②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、20～30トン（1月：30～80トン）と少ない状態で推移しました。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年7月以降、増加した状態が続いていますが次第に減少しています。

・地殻変動の状況（図9、図10）

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されていましたが、11月頃から停滞しています。

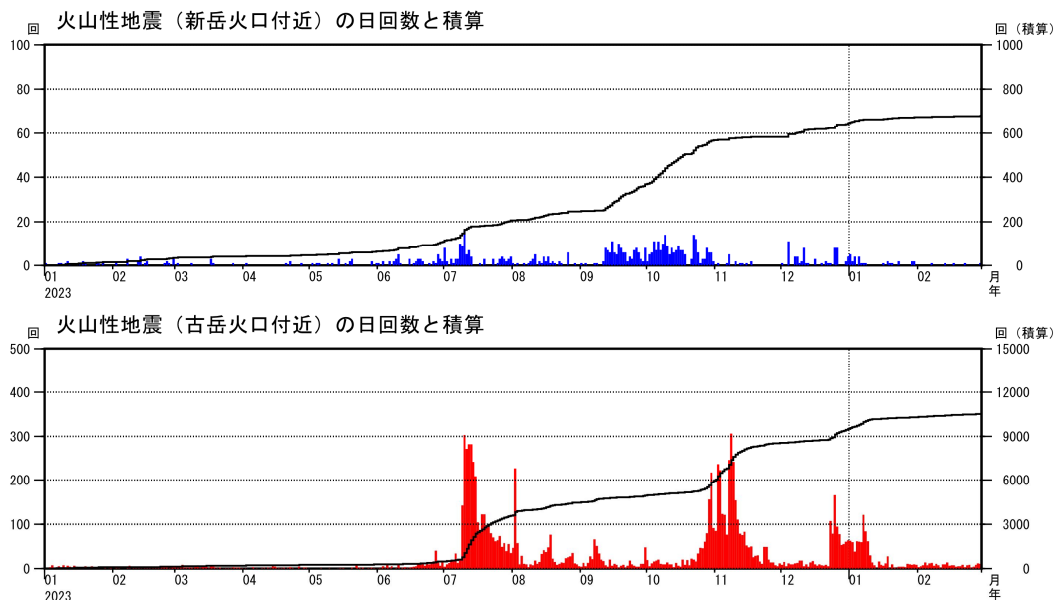


図1 口永良部島 新岳及び古岳火口付近の火山性地震の日別回数（2023年1月～2024年2月）

- ・火口付近の浅いところにおいてやや活発な地震活動が続いています。
- ・古岳火口付近を震源とする火山性地震は、増減を繰り返しながら多い状態が続いていましたが、1月中旬頃から減少しています。
- ・新岳火口付近の火山性地震は、少ない状態となっています。



図2 口永良部島 噴煙の状況（本村西監視カメラ）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（1月：400m）まで上がりました。古岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 100m（1月：200m）まで上がりました。

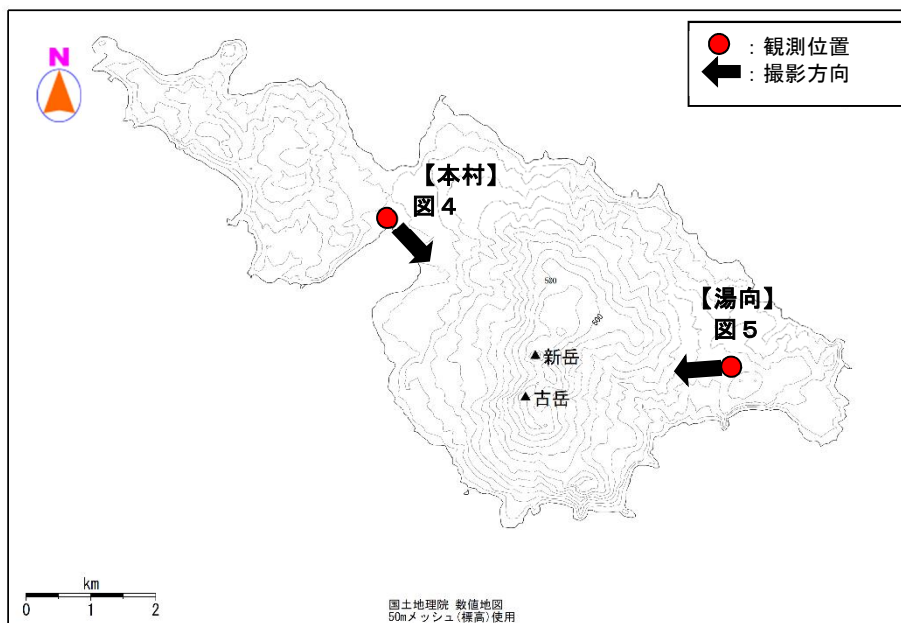


図3 口永良部島 山麓からの観測位置及び撮影方向

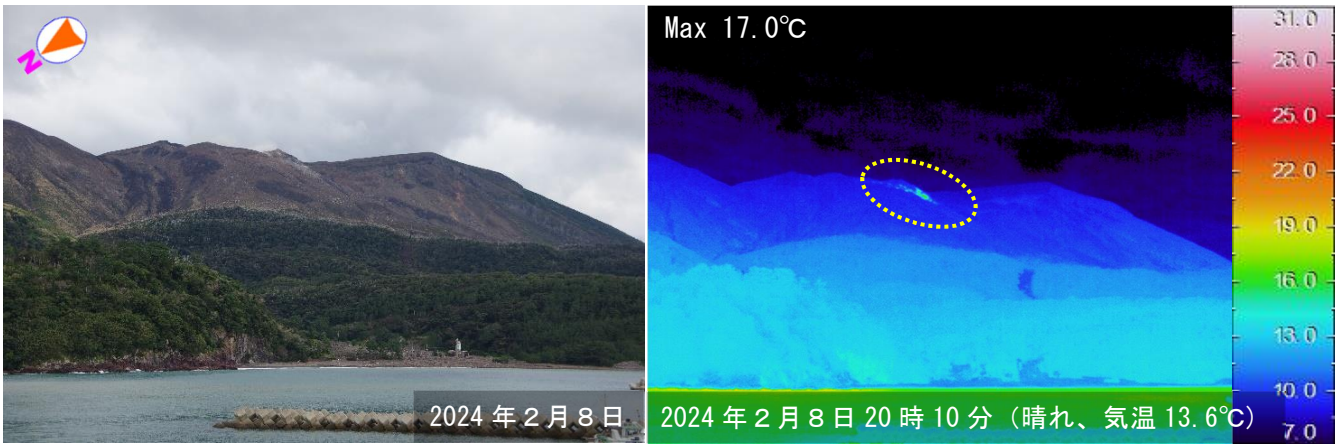


図 4-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

7日から9日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（黄色破線内）を確認しましたが、地熱域の温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。

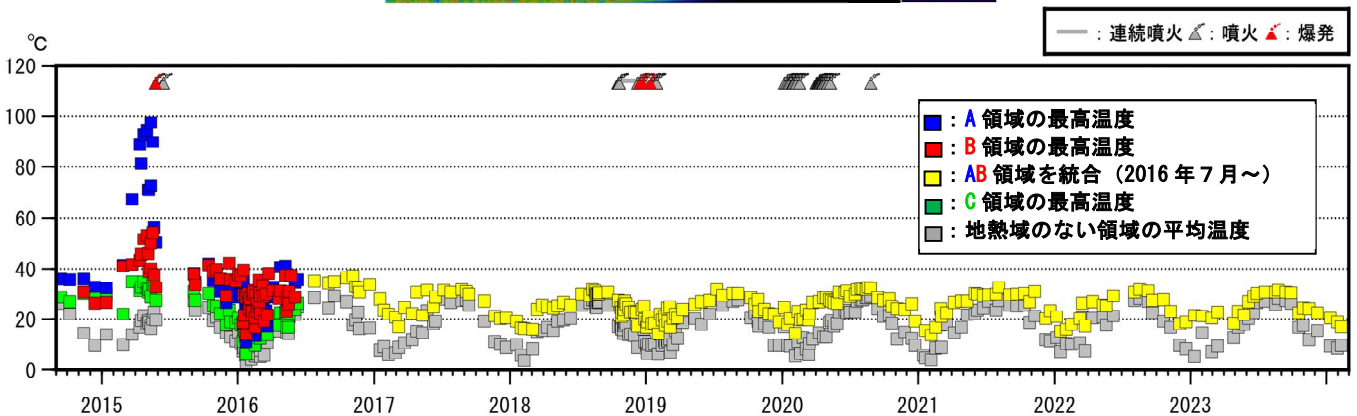
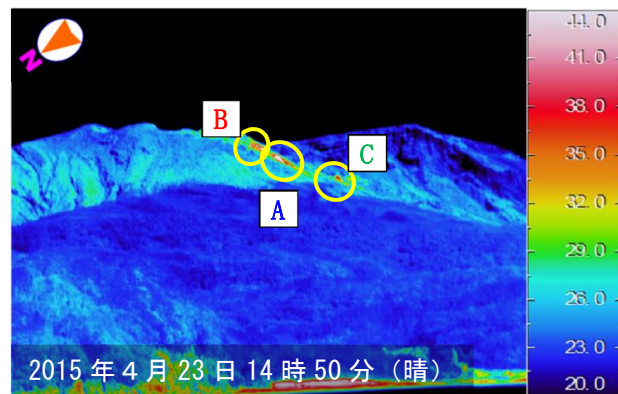


図 4-2 口永良部島 新岳火口西側割れ目付近及び新岳南西側斜面の地熱域の温度時系列
(2014年8月～2024年2月)

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近（AB領域）の地熱域の温度に特段の変化はありませんでした。

2016年7月よりA領域とB領域を統合しています。

2016年7月以降、C領域で地熱域は観測されていません。

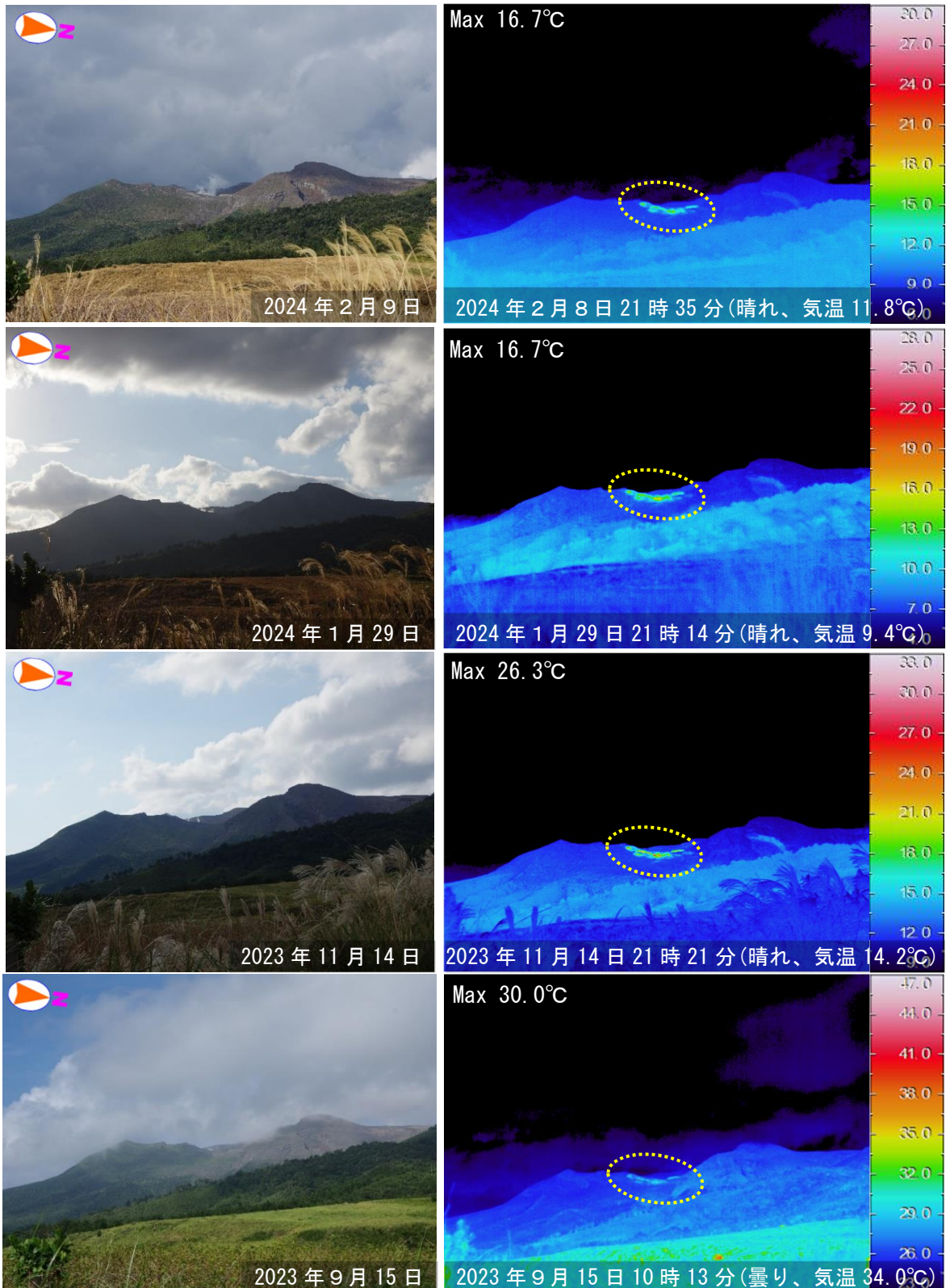


図 5-1 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

- ・ 7日から9日に実施した現地調査では、古岳の火口縁をわずかに超える白色の噴煙を観測しました。また赤外熱映像装置による観測において、古岳火口周辺で引き続き地熱域（黄色破線内）を確認しました。
- ・ 古岳火口付近の地熱域では、2023年10月頃から12月頃にかけて地熱域の拡大及び温度の上昇が認められましたが、1月以降、温度は低下傾向となっています。

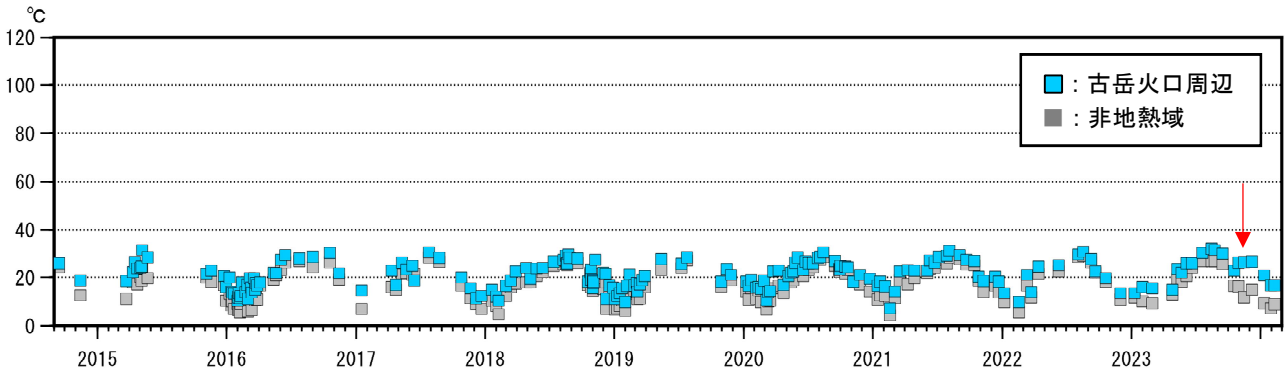


図 5-2 古岳火口周辺の地熱域の温度時系列（2014年9月～2024年2月）

古岳火口付近の地熱域では、2023年10月頃から12月頃にかけて温度の上昇（赤矢印）が認められましたが、1月以降、低下傾向となっています。

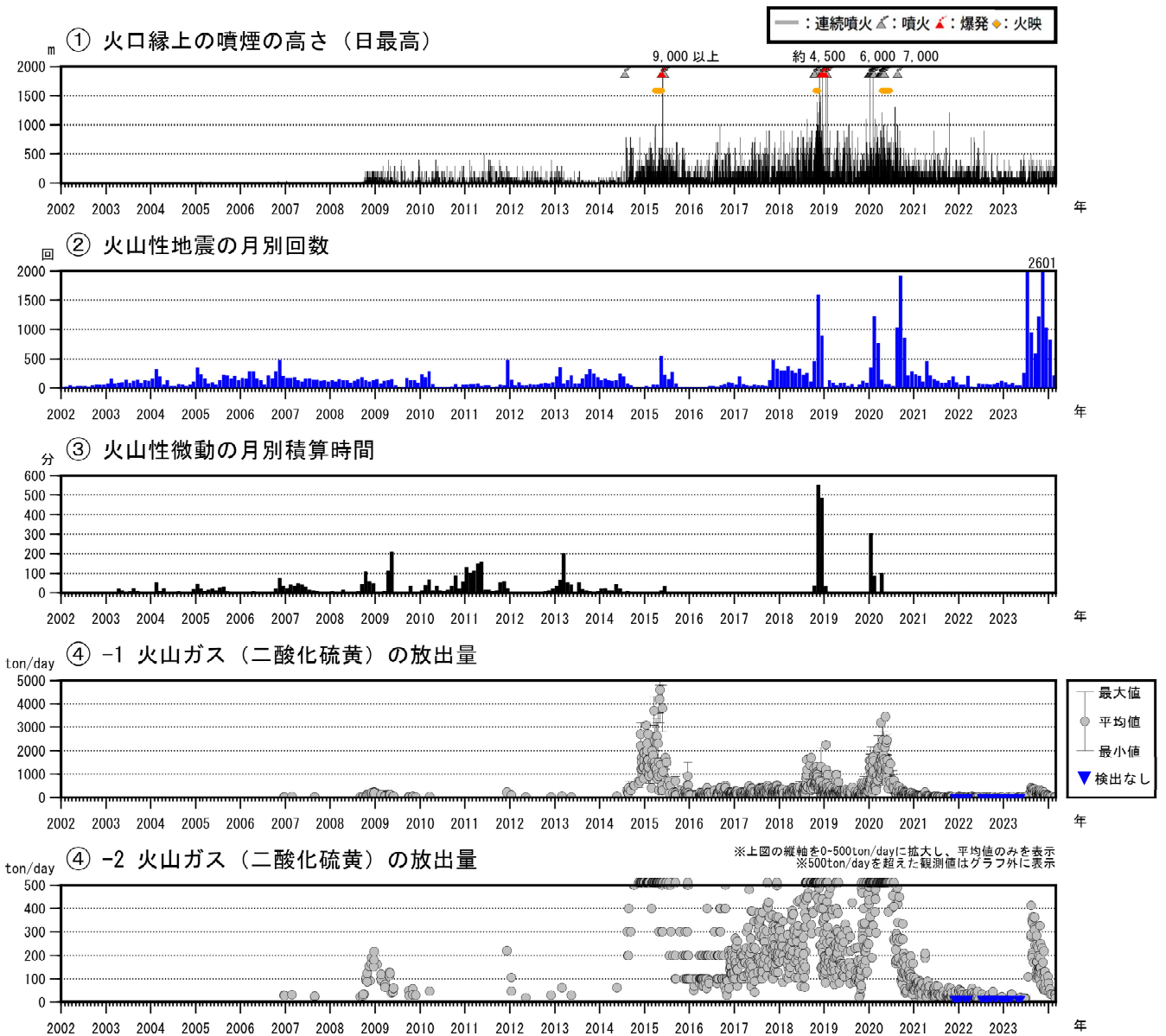


図 6 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2024年2月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 8.0 μ m/s）」「FDKL（京）（上下動 6.0 μ m/s）」「新岳西山麓（上下動 3.0 μ m/s）」「新岳北東山麓（上下動 1.0 μ m/s）」「古岳北（上下動 6.0 μ m/s）」「古岳南山麓（上下動 4.0 μ m/s）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

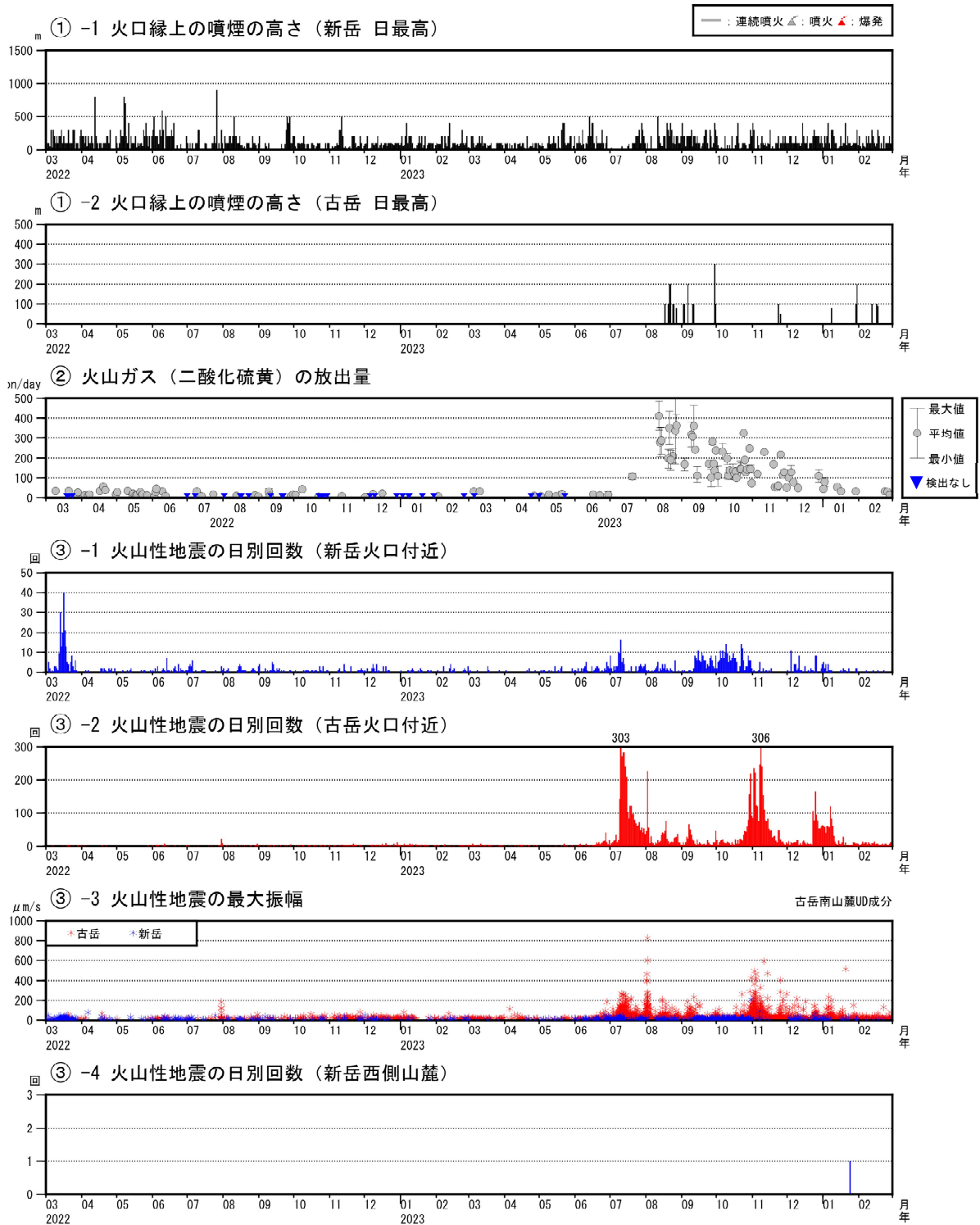


図7 口永良部島 最近の火山活動経過図（2022年3月～2024年2月）

< 2月の状況 >

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（1月：400m）まで上がりました。古岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 100m（1月：200m）まで上がりました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、20～30トン（1月：30～80トン）と少ない状態で推移しました。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年7月以降、増加した状態が続いていますが次第に減少しています。
- ・火山性地震の月回数は 221 回（1月：831 回）と前月と比べて減少しましたが、2023年6月以降、増加した状態が続いています。火山性地震は主に古岳火口付近で発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

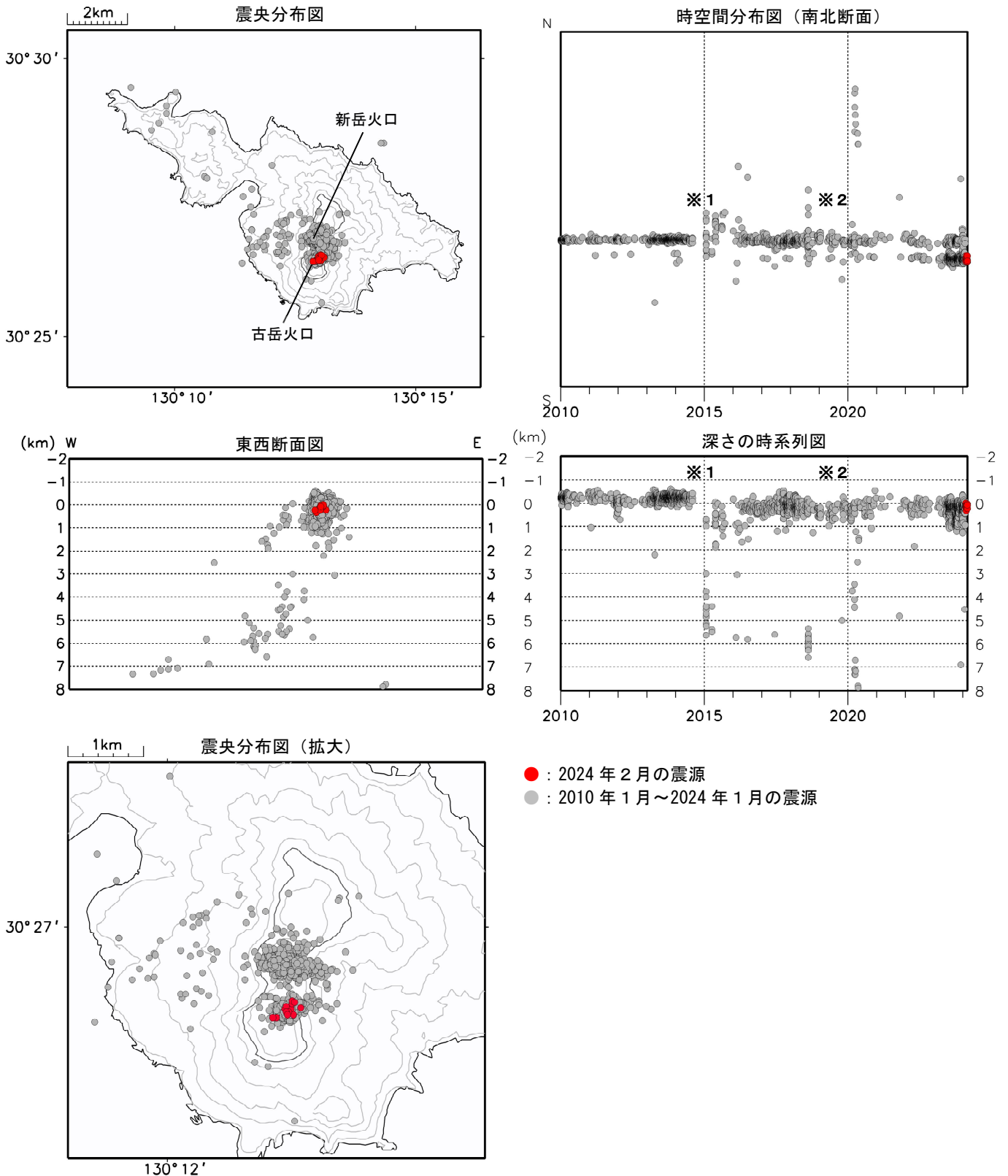


図8 口永良部島 震源分布図 (2010年1月～2024年2月)

< 2月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日までは検知力や震源の精度が低下しています。
 - ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日までは検知力や震源の精度が低下しています。
- その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

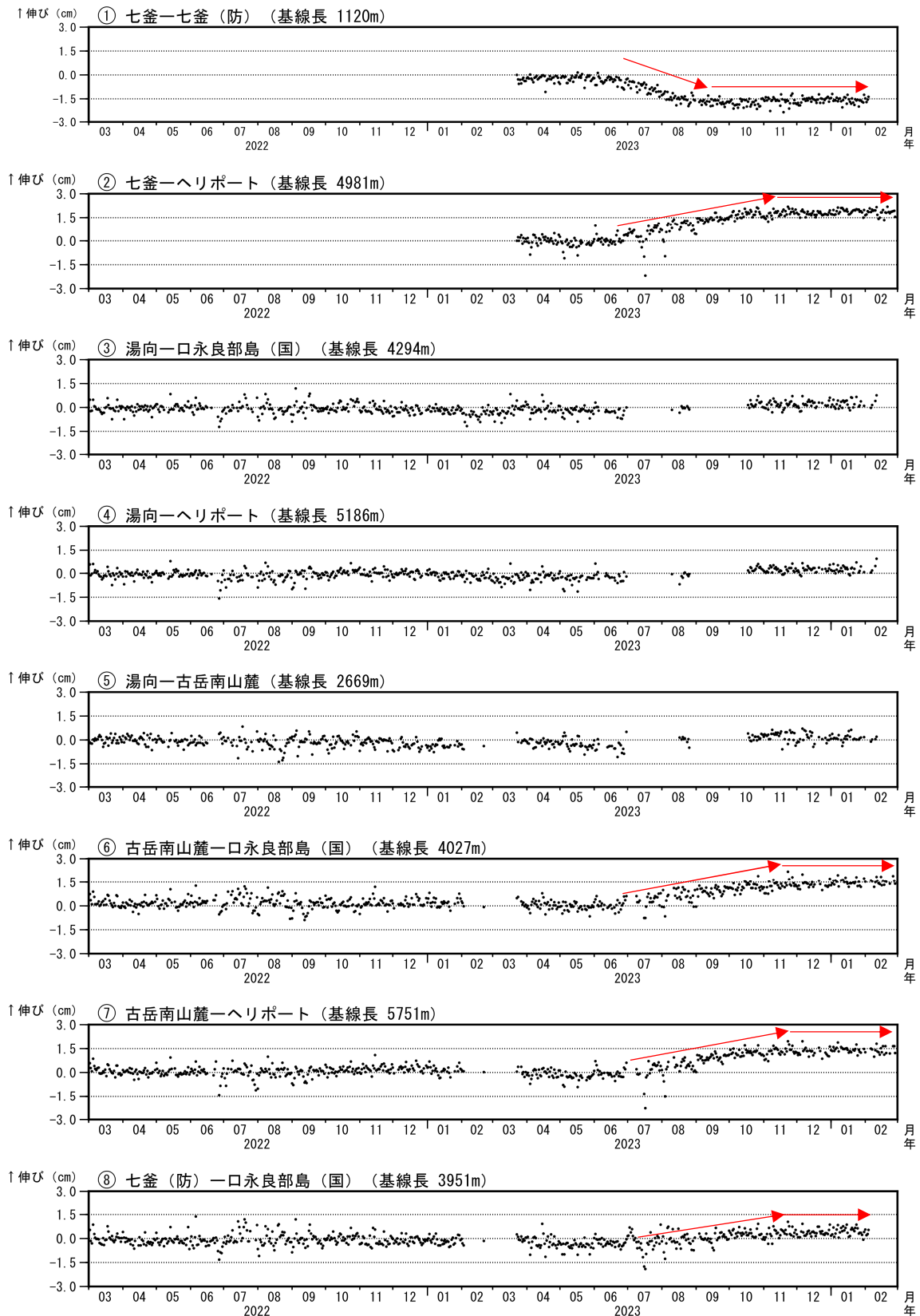


図9-1 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2022年3月～2024年2月）

- ・GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されていましたが、11月頃から停滞しています（赤矢印）。
- ・2023年6月下旬からの変動は、古岳近傍の一部の基線（①）では9月頃から停滞しており、その他の基線（②、⑥～⑧）においても11月頃から停滞しています。

これらの基線は図10の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

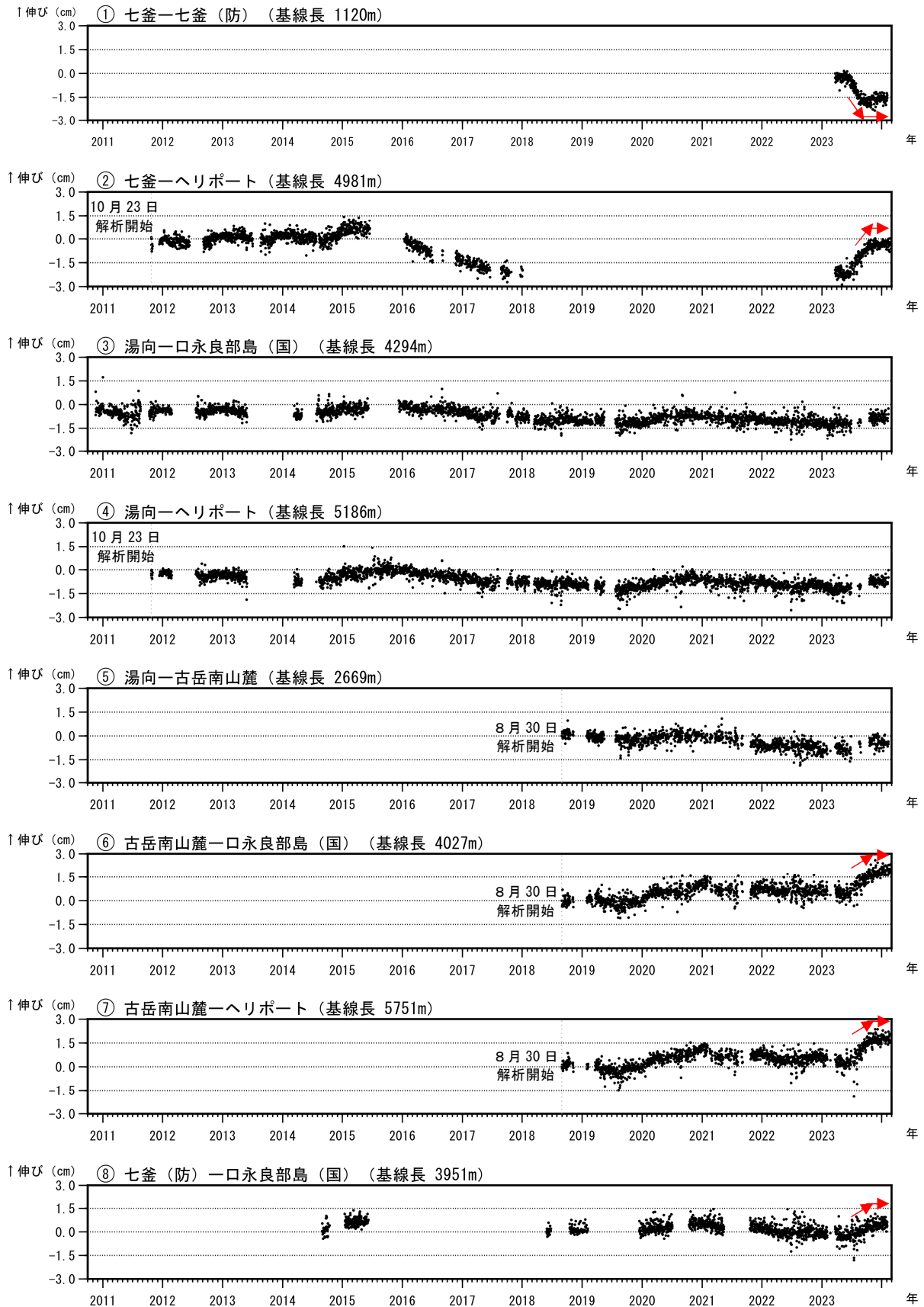


図9-2 口永良部島 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2024年2月）

これらの基線は図10の①～⑧に対応しています。
 基線の空白部分は欠測を示しています。
 2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。
 2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。
 （国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

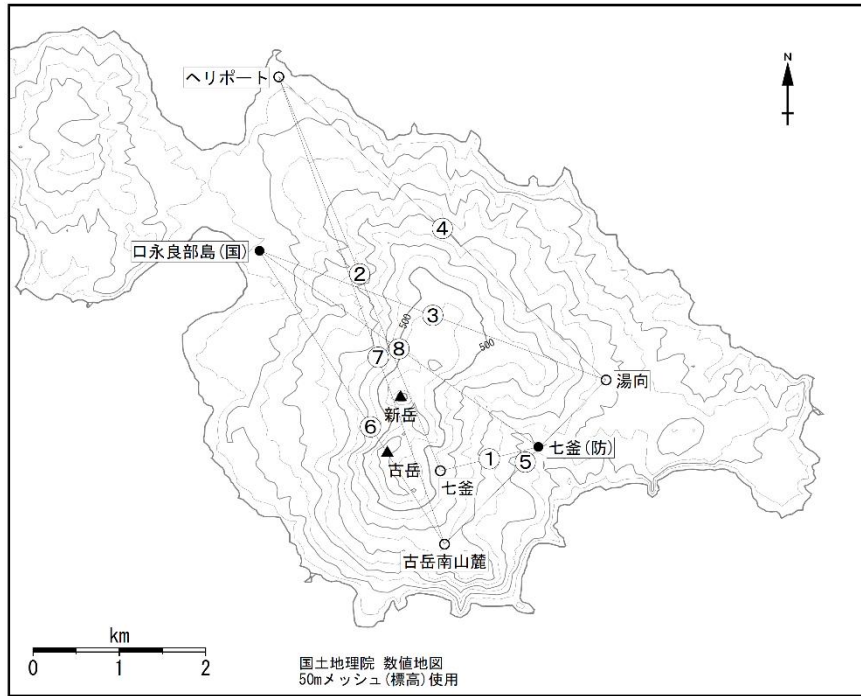


図10 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

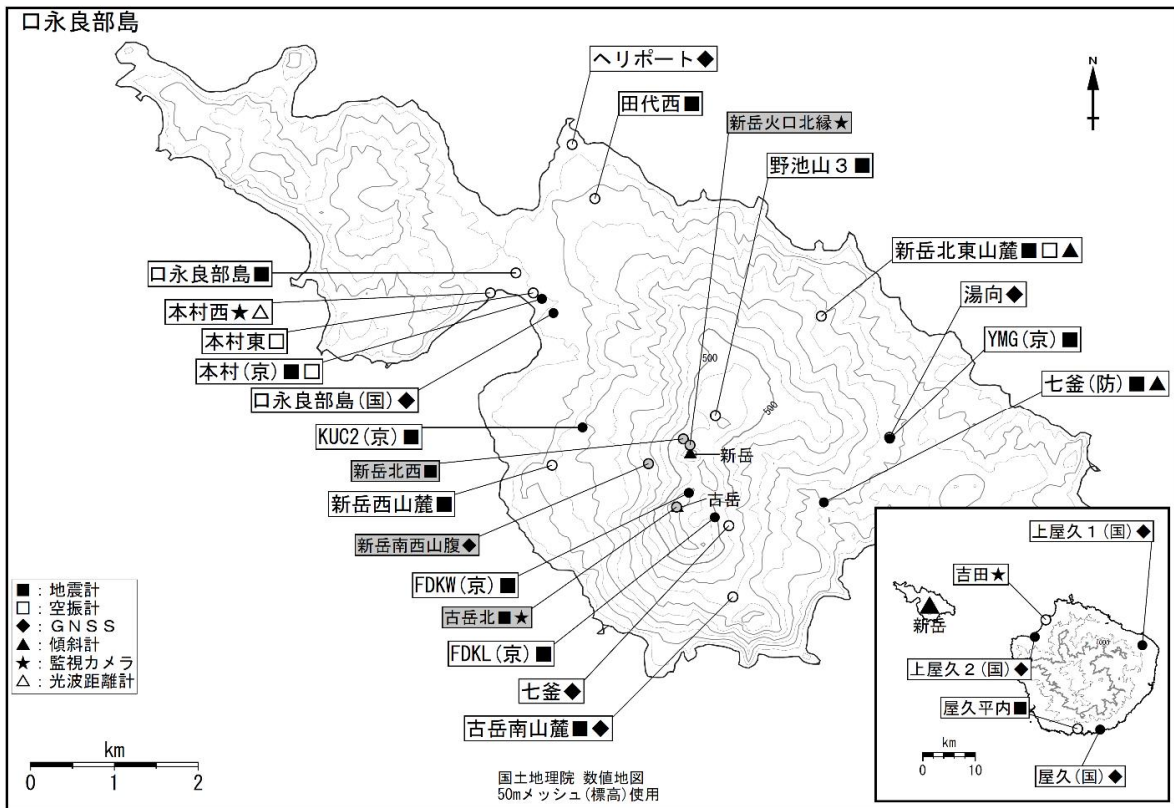


図11 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。